

膜を有する2.5×2.2×1.0cmの腫瘍で悪性の所見はなく、NSE・グロモブランニン・ソマトスタチンで染色される膵島細胞腫の診断であった。胃内容の停滞が見られた他は特記すべき合併症も無く、術後経過は良好であった。膵頭部の良性・低悪性腫瘍に対しての膵頭十二指腸第Ⅱ部切除は、安全性・機能温存性の面からも有用な術式であると思われる。

13. 膵動静脈奇形による食道静脈瘤に対し PpPD を施行した1例

吉田清哉, 遠山洋一, 中村純太
長 剛正, 柳澤 暁, 柏木秀幸
(東京慈恵医大柏・外科)

症例: 52歳, 男性。H13年1月4日腹部膨満感にて近医受診, 腹部CT検査にて腹水, 脾腫を指摘された。治療・精査目的にて当院内科紹介受診となった。食道静脈瘤が認められEIS施行した。精査にて膵動静脈奇形による門脈圧亢進症を認めたため, 手術目的にて外科転科となった。

既往歴: 25歳, 自然気胸

検査所見: WBC 3600/ μ l, RBC 286万/ μ l, Hb 8.4g/dl, Ht 24.9%, Plt 8.8万/ μ l, PT 88%, APTT 42.2秒, フィブリノーゲン定量 361mg/dl, T-Bil 0.3mg/dl, AST 20IU/l, ALT 34IU/l, LDH 138IU/l, γ -GTP 33IU/l, ALP 159IU/l, AMY 30IU/l, TP 5.9g/dl, Alb 3.8mg/dl, UN 9mg/dl, Cr 0.9mg/dl, Na 140mEq/l, K 4.2mEq/l, Cl 107mEq/l, CRP 5.2mg/dl, HBs 抗原(-), HVC 抗体 0.2

経過: 上記診断にてH13年3月12日手術を行った。膵頭部から後腹膜へのドレナージペインが発達していた。膵頭十二指腸切除を施行, 再建には今永法を用いた。病理の結果は膵頭部の膵小葉間を中心に周囲脂肪織から十二指腸粘膜下に広がる壁の膜厚と内腔の拡張を示す動静脈血管の増生が見られ, まだらに動静脈の移行を認め, 内膜の繊維性肥厚や器質化血栓を伴っていた。悪性所見は認められなかった。

結語: 膵動静脈奇形による門脈圧亢進症はまれであり, 報告する。

14. 胆嚢癌に対する腹腔鏡下手術の検討

草薙 洋, 加納宣康, 深澤基児
小川太志, 太田 篤, 玉木雅人
山田成寿 (亀田総合・外科)

胆嚢癌に対する腹腔鏡下手術症例を検討し, 本術式の位置付けについて言及する。対象(LC群)は1991年11月—2000年12月までに当科で施行した腹腔鏡下胆嚢摘出術843例中に胆嚢癌と判明した18例(2.1%)。男性

8例, 女性10例で平均年齢63.4歳であった。術前診断では胆嚢結石症12例, 胆嚢腫瘍又はポリープ5例, 胆嚢炎1例であった。胆嚢癌診断時期で術後に初めて癌が判明したものが8例あった。癌深達度別ではmが7例, mpが1例, ssが9例, seが1例であった。手術術式ではm癌7例に対しては胆嚢摘出術のみを施行し, mp以深の癌に対しては5例に追加手術を施行したが, 6例には追加手術は施行しなかった。また6例に術中胆汁流出を認めた。予後は2例に肝転移再発例を認めた。同時期の非腹腔鏡下手術症例(OC群)16例とLC群を比較した。胆汁流出はLC群で有意に多かった。KM法による生存曲線では5年生存率でLC群87.4%, OC群64.6%であったが, 両群間に有意差は認められなかった。以上より腹腔鏡下胆嚢摘出術はm癌に対しては根治術としてmp以深の癌に対してはtotal biopsyとして有用であると考えられる。

15. 当院における肝内結石症肝切除症例の検討

吉岡 茂, 太枝良夫, 磯野敏夫
若月一雄, 岡田大助, 鍋嶋誠也
(千葉県立海浜・外科)
木村道雄, 北 和彦, 齊藤博文
鈴木拓人 (同・内科)

今回われわれは, 当科における肝内結石症肝切除症例に対し検討したので報告する。当科では, 現在までに肝内結石症に対し, 7例の肝切除を施行した。病型分類では, I型3例, IE型4例, 結石存在部位はR型1例, L型5例, RL型1例であった。7例中, 6例は肝内胆管に明らかな狭窄を認めた。肝切除術式は, 外側区域切除4例, そのうち1例には, 肝内胆管癌がみられtw(+)のため, 内側区域切除が追加された。左葉切除は2例, そのうち両葉型の1例には, 右肝内結石に対し, 術中胆道鏡下に切石した。後区域切除は1例であった。術後重篤な合併症は1例もなく, 全例遺残結石も認めなかった。病理組織では特に肝葉萎縮例には, 異形性が強く, 肝内胆管癌を1例認めた。胆管癌合併肝内結石症の術前診断は, 各種画像診断を駆使しても困難な場合があり, 特に, 肝葉萎縮例には積極的に肝切除を行う必要がある。

16. 肝内胆管癌のLOH解析と肉眼型別の予後の検討

大塚将之, 伊藤 博, 中川宏治
清水宏明, 吉留博之, 清水善明
嶋村文彦, 伊藤勝彦, 岡屋智久
新村兼康, 三橋 登, 若林康夫
宮崎 勝
(千大院・臓器制御外科)

肝内胆管癌切除後良好な予後を得るために重要な因

子は何かを探るため45切除例を対象として解析した。

全切除例の1, 3, 5年累積生存率は61, 38, 24%であった。肉眼分類部では胆管内発育型が有意に予後良好であり、予後不良な他型では、特に腫瘤形成優位型で、肝内転移の有無・肝被膜浸潤の有無・切除断端への癌浸潤の有無がその予後を有意に反映していた。

癌抑制遺伝子の機能喪失に関連するヘテロ接合性の消失 (LOH) はchromosome17p12 (p53遺伝子近傍), 8p22に高頻度で, 8p22にそれを有する症例に2年生存はなく, 新たな予後規定因子となる可能性が示唆された。

和光純薬工業(株) 代理店

- ▶ 免疫関連試薬・機器
- ▶ 分子生物関連試薬・機器
- ▶ 細胞工学関連試薬・機器
- ▶ 分離・分析関連試薬・機器

株式会社 薬研社

本 社 〒260-0843 千葉市中央区末広四丁目19-5
TEL (043)265-4141
FAX(043)265-4143

柏営業所 〒277-0831 千葉県柏市根戸386番15
TEL (0471)37-2255
FAX(0471)37-2250

代表取締役 宮階 忠雄